

二人きりの留守番、血のつながらない義妹と―― 親のいない家で、線を越えた夜――

親の単身赴任で、血のつながらない義兄と義妹が二人きり。合意の上の成人同士が、誰もいない家でほどけていく同居純愛

夜更け文庫／夜野しずく

本作品はフィクションです。登場人物はすべて18歳以上の成人であり、実在の人物・団体とは一切関係ありません。

プロローグ

瀬戸^{せと}莉子^{りこ}のことを、親戚はみんな「しつかりした、いい娘さんね」と言う。

明るくて、よく気がついて、誰にでも分け隔てなく笑いかける。颯真の父と莉子の母が再婚して、戸籍のうえで「兄妹」になってから五年。法事でも、正月の集まりでも、莉子はいつも台所と座敷を行き来して、年長の親戚に酌^{しやく}をして回る、そんな如才^{じよさい}のない娘だった。

——その莉子が今、俺の腕のなかで、まるで別人みたいに息を乱している。

夜のところが、部屋の隅々まで満ちていた。常夜灯^{じょうやとう}のほのかな橙^{だいだい}だけがともって、カーテンの向こうでは、住宅街の街灯がずっと遠くにかすんでいる。親が単身赴任とその付き添いで家を空けて、もう三日が過ぎた。広いはずの家に、今は二人ぶんの呼吸しかない。

昼間の莉子を思い浮かべる。買い出しの袋を提げて帰ってきて、玄関で「お兄ちゃん、ただいま」と笑う。洗濯物を畳みながら、大学で描いている課題の絵の話を楽しそ

うにする。親戚に囲まれば、誰よりも先に立ち上がつて気を回す。誰もが「いい義妹さんね」と口を揃える、あのまっすぐで明るい佇まい。たす

その同じ唇が、今は俺の名前だけを、溶けるように呼んでいる。

「……颯真、さん」

背に流していた長い黒髪が、白い首筋に幾筋も乱れて貼りついていていた。いつもは意志の強い光を宿している二重の目もとが、今は潤んで、こちらを見上げてくる。血のつながりなど、もとから一筋もない。父と母が再婚するまで、俺たちは互いの顔も知らなかった、まったくの他人だった。一緒に育った子ども時代もなければ、分け合った過去もない。だから「兄」「妹」という呼び名より先に、俺はこの人を一人の女として知ってしまった。

それでも——この数日まで、俺はその意識に、ずっと蓋をして生きてきた。

五年だ。父と沙織さんが再婚して、戸籍のうえで「兄」と「妹」になってから、五年。そのあいだずっと、颯真はこの気持ちを胸の奥底に押し込めてきた。年に数回、法事や正月に顔を合わせるたびに芽生えかけるものを、そのつど慌てて踏み消して。これ

は決して表に出してはいけない感情だと、自分に言い聞かせて。親同士があれほど穏やかに寄り添っているのに、その息子と娘が道を踏み外すなど、あつてはならないことだと。

血のつながらない、戸籍だけの兄妹。その建前さえ守っていれば、踏み外さずにいられると思っていた。けれど親のいない家で、二人きりの時間を分け合ううちに、抑えてきたものが少しずつ崩れていって――そして、この夜、ついに俺たちはその線を越えた。

莉子の指が、颯真の背に回される。しがみつくように、けれどどこか確かめるように。その爪が、わずかに肌に食い込む。昼間の、誰にでも如才なく笑いかける「しっかり者の義妹」は、もうどこにもいなかった。颯真の腕のなかにいるのは、ただ一人の女として、すべてをさらけ出している莉子だった。



——ここから先は製品版でお楽しみください——